

天 城 山 の 植 物

杉 本 順 一*

Plants of the Amagi Mountains in the Izu Peninsula

Junichi SUGIMOTO*

1 は じ め に

静岡県伊豆半島の主峰天城山について、古くより多くの文献を見る。とくに詳しく正確であるものは秋山富南著萩原氏増訂の豆州志稿であろう。同書の天城山の項に、「往昔狩野山と呼ぶ。あんずるに天城の山は甘木の義にして山中多く土常山(筆者註、アマギアマチャ)を産するより起れるならん。全山樹木うっそう、頗る良材に富む…」とあり、古く鎌倉時代から天城山の良材で舟を作ったと伝えられている。マツ、スギ、モミ、ケヤキ、ツガ、ヒノキ、カヤが天城七木と称して良材とされた。或はまた、スギ、ヒノキ、マツ、ケヤキ、クス、カシ、カヤ、モミ、ツガの九木を公用樹に指定して一般の伐採を禁じたという。

天城山は江戸時代には宝暦9年(1759年)から徳川氏の所領として代官江川太郎左衛門が之を管理した。明治維新に入って海軍造艦材の伐採の所となった事で知られ、明治7年内務省、明治14年農商務省、明治22年御料地に編入された。昭和22年国有林に移された。徳川氏所領時代には伐採跡へは代りに御礼杉として杉が植樹され保存された。御礼杉は大戦時に大方切られて、今は河津、西伊豆側に少数残っている。

2 天 城 山 の 地 理 一 般

伊豆半島は面積1,430平方キロ、大部分は山地で、平野は狩野川流域に僅か開けているのみである。馬蹄形に内側を北に向けて天城山脈がある。東側を東天城山脈と主峰の天城山で最高点は標高1,406.8m、西側を西天城山脈と東よりやや低い。そのうちで国有林は尾根すじを中心に奥の高い所を占め、国有林の面積は約15,530haである。しかしここに天城山と称して取り扱って見たい地域は東は伊東市大室山、鹿路庭峠、矢筈山(810m)、遠笠山(1,197m)、万二郎岳(1,300m)、万三郎岳(1,406.8m)、白田峠、八丁池、天城峠に至る東天城山脈。南は猿山(999.8m)、長九郎山(996m)までの南天城山脈。西は天城峠から旧天城峠、滑沢峠、ツゲ峰、猫越峠、宇久須峠、棚場山(758m)に連なる西天城山脈の一帯で、北側の狩野川水源地帯では中伊豆町原保、湯ヶ島町湯ヶ島まで、南は河津町梨本、松崎町池代、西伊豆町白川および大沢里を結ぶ線ぐらいと考える。この広義の天城山城で低山地帯は概ね民有地である。

地形、地質、地史および気候については他に多くの文献に詳しいので省略する。一口にいえば、第三期中新世に海底に噴出した基底の上に、洪積世に入って活発に活動した天城火山及び之に並ぶ火山の噴出によるもので、今は死火山となり、谷の浸蝕も進み、最後に多数の寄生火山、たとえば大室山、矢筈山、鉢山、鉢窪山なども活動が止み、一部に軽石沢の如く軽石の熔岩流もある。

気候は一口にいえば暖い所で高知県、和歌山県と大体似たような所である。冬は割合に暖かく、近海地は雪を見なく、夏はやや涼しい。しかし夏期の雨量は天城主峰を中心に著しく多い。

3 植 生 の あ ら ま し

伊豆半島の植生は大体三地域に分かれる。一は海岸地方であるが、ここでは天城山に関係がないので省くことにする。二は低山地の暖帯林で、主としてシイ-カシ帯ともいえる。三は山の上部でブナを主木とする温帯である。暖帯と温帯との境界は天城山脈の尾根の外洋面と内側(狩野川の水源地帯)とでは大差がある。

* 静岡市八幡5丁目 5, Yawata, Shizuoka

外側ではブナ帯は800 m以上、所により900 m以上に発生する。天城山ではないが、その北の続きの山の日金山では800 mに暖地性常緑低木のツルグミを見た。また達磨山では沿岸性の暖帯植物で常緑木のウバメガシが800 mまで上る。天城峠の外側二次林でヒサカキ群落が800 mに達する。

しかし内側では700 mあたりまでブナ帯が低下し、場所によっては600 mまでヒメシャラ、アマギツツジ、ヒノキ、シャクナゲなどの木が低下している場所がある。

ブナ帯は国有林に属し、天城山脈の主にも東南部に発達している。ブナが最も多く、イタヤカエデ、ヒメシャラ、オオイタマメイゲツ、ウリハダカエデ、アカシデ、ミズメ、リョウブ、サラサドウダン、トウゴクミツバツツジ、マメザクラ、ノリノキ、アマギツツジ、チチブドウダン、マユミ、タンナサワフタギ、カマツカ、アセビ、ツクバネウツギ、クロモジなどが多い。着生植物は場所により多い所もあるが、一般にあまり多いとはいえない。シダ植物のミヤマノキシノブ、ヒメノキシノブ、シノブ、所によってオオクボシダ、スギラン、イワオモダカを見る。その他はアマギイワギボウシ、ケナシヤシヤビシャクなどである。林下にササ類が多い所と無い所とある。900 m以上にはアマギザサが主で、八丁池周辺に多い。西天城の尾根ではコアオスズが多いが、八丁池方面では900 m以下にアマギザサの下方に交代する。更に600 m以下にはスズが生える。ササの無い所は下層の低木や、草本の種類が多く、その中には植物学的に珍しいものや、分布上の問題で興味あるものを生ずる。ササの多い所は西天城連山の尾根で、全くササ原となり、或はただ、イヌツゲ、アセビ、外数種の低林が生えている。これは伐採又は野火の跡を放置したためササ類の繁茂が著しくなったもので、そのため、植林ができなくなってしまっている。多くの植物はササ類に負けてしまって生活できなくなる。ササ原を見て美しいという人は自然の本当の姿が判らない人で、私はいつもササ原やススキ原を見て、その殺風景に幻滅を感じる。天城山の主峰も開発が進めば、こんなササ原と化すであろう。

暖帯林は通常常緑樹の旺盛な森林である。しかし天城山の暖帯林は九割位は伐採され二次林又は植林地である。自然林は国有林中に数カ所保護林として残されている。たとえば浄蓮、桐山、しらぬ池周辺その他二、三カ所に見られる。天城山の暖帯林はウラジログシ、ツクバネガシ、アカガシ、スダシイ、タブ、ヤブニッケイ、イヌガシ、シキミ、サカキ、ヒサカキ、ヤブツバキなどが多い。しかし針葉樹のツガ、モミ、ヒノキ、カヤ、スギの混交地があり、モミ、スギは巨木が今も残っているが、これらは有用樹のため大方は伐採されて残りは少い。暖帯林にはまた落葉樹も混生し、ケヤキ、ヤマザクラ、フサザクラ、カエデ、カマツカ、シデ類、低木にはアマギアマチャ、シキミ、アオキ、ミヤマシキミ、アマギベニウツギ、コガクウツギ、コアジサイ、コミネカエデ、ノリノキ、クロモジ、アブラチャンなど多く生ずる。民有地域では自然林は僅かに谷間や崖地に残るだけで、他は二次林又は植林地で、植林樹はスギ、ヒノキが多くクロマツ、アカマツ、オオシマザクラなども見る。近年薪炭の用が衰退したので、二次林が俗にいう雑木林として木が大きくなり茂るようになった。

伊豆半島のシダ植物と種子植物は品種、間種、帰化植物を全部加えて計算して2,400品に達する。その内で天城山全体で(民有林を含む)約1,600ぐらいと思う。

4 天城山の植物探求と学者の感想

伊豆は薬草の産地として知られ、江戸時代にはハナミョウガをイズシュクシャと称し、イズセンリョウ、ミシマサイコ等と共に伊豆から採って江戸へ送った。文化6年(1809年)幕命により幕医の渋江長伯、天保9年(1838年)に佐藤信淵が伊豆に採集した記録がある。明治初年にはフランス人 Savatier (1830~1891) が横浜に在住の佐波一郎氏に採集させた。そのときの命名として、アマギアマチャその他の発表がある。理科大学(後の東京大学理学部)の大久保三郎氏(1857~1917)は明治16年(1883年)天城山でミヤマツチトリモチを発見した。その後日本の学者で天城山で採集した人は明治21年池野誠一郎氏(1861~1939)と堀正太郎氏、明治24年、松村任三氏(1856~1928)は前記の大久保氏、および藤井健二郎氏と共に、いずれも天城山に採集したが、天城街道に沿って、天城峠を越しただけであると思われる。

その後も学者の天城山採集といっても、天城街道か、修善寺、湯ヶ島あたりまでが多い。大正6年久内清

孝氏は浄蓮滝でハイコモチシダを発見、原虎之助氏は同所でタキシダを採集、児玉親輔氏は同所でミゾシダモドキを採集した。武田久吉博士は八幡野でリュウビンタイを見出した。村松七郎氏は昭和元年天城山でアマギカンアオイを発見、緒方正資氏は天城山？でヒロハアツイタを採集。その後も多くの採集家や学者により、新種や新分布の発見がつづいた。昭和5年5月天皇陛下は天城山に行幸になられた。天城峠のトンネル前で御下車、それより御徒歩で八丁池まで登られた。天候が悪いにもかかわらず、陛下は珍しい植物の多い天城山で一つ一つ植物を御覧になりつつ上下された。陛下が各地の山へ行幸なされた内で、最も御興味深く喜んで御出になった所は天城であろう。その為に予定時間がずっと遅くなり、静岡市御用邸へ御着きになったのは日の長い5月の日も暮れた時であった。如何に天城山は植物が多く珍品や美しいものなどが豊富であるかよく判る。このとき筆者も静岡県各地で採集した植物標本を天覧を賜る榮に浴した。その中に天城山で私が最初に発見したイズカニコウモリがある。行幸地には記念碑を建てる風習がある。しかし私はこの植物の豊庫天城山の自然をそのまま保存して後世に残すことこそ最良の記念碑と思う。

私が天城山八丁池に登ったのは大正13年である。八丁池の周辺にモリアオガエルや卵塊が多く、池中は何万のイモリが住んでいた。そのときイズカニコウモリを発見した。タイプとして北村博士が命名した標本は昭和5年9月猫越峠で私が採集したものである。

昭和5年8月京都大学の田代善太郎氏が天城山に登山採集会を開いた。私もお供し珍しい天城山の植物を観察し採集した。田代氏は植物分布に詳しい。天城山の植物で、日本の南部に多く生えるもので、この山が分布北限のもの多数を見出した。この旅行で得られた論文として現われたのが、植物分類地理という学術雑誌の13巻の186頁に論じられている。

植物分類学者として文化勲章を受賞した牧野富太郎博士は昭和6年9月26日から29日まで天城山において、静岡県教育会主催の採集会で数十人の会員に指導下さった。私もそのときお供したが、先生はその植物の豊富にして且つ珍品希品が多いのにすっかり喜んで、天城山の山の中で日が暮れるまで研究に余念がなかった。そのときに湯ヶ島小学校の先生が採集したアマギツツジの標本を見て、即座に新種と断定された。博士は「日本各地の山に登られた内で、こんなに珍しい植物が揃っている山は他に無い」と語られた。

同じ昭和6年6月に東京大学の中井猛之進博士は学生数名と共に（その中には前川文夫博士も居る）天城山に採集に行き、キバナショウキラン、アマギツツジをはじめいろいろ珍しいものを沢山採集した。丁度私は東大の中井博士の研究室（当時は小石川植物園の中にあった）に伺い、博士の採集品の一部も拝見したが、御話によると「珍しい植物が豊富で、日本有数の植物の豊庫である」と太鼓判を捺したような事であった。日帰りの旅行で二つ以上も新種が見つかるなどは、他の山には見られない事である。

昭和15年に京都大学の小泉源一博士は単独で天城山に登って植物を採集され、帰途に私の宅へ寄り、採集品を見せて下さった。「天城山は日本でも有数の植物の豊庫であるから、大切に自然を保存したいと思う、君も天然記念物の方をやって居るから丁度よい、一つ骨を折って下さい」と云われた。

昭和25年天城山を富士箱根国立公園に編入する運動が起り、静岡県当局は天城山の学術調査隊を編成して実地調査を行った。私は植物を担当した。その報告は静岡県発行の「伊豆半島」（1951年）に書いた。翌年国立公園に伊豆半島の天城山や沿岸などが編入された。そのとき天城山にスカイラインを作る計画が出来たという。

東京大学農学部倉田悟博士は天城山にシダ類や樹木を研究に昭和23年頃から度々来られて、東京林友、植物趣味、北陸の植物、その他多くの学術誌にその都度天城山などで発見された新事実を公表された。昭和35年東京営林局から「伊豆のしだ」という学術報文を出され、天城営林署の益子進氏、湯ヶ野小学校の佐竹健三氏も協力した。昭和32年日本シダの会は天城山でシダ類研究大会を開き、伊藤洋博士、倉田悟博士をはじめ会長方富太郎氏以下多数の会員が集り、調査の結果、ごく小地域だけでも多数の暖世性のシダを確認し、前記の専門家も天城山のシダ相の珍種や分布北限種が著しい点に舌を巻いて驚き、以後もシダ研究者の訪れる者が絶えない。

昭和27年11月京都大学の北村四郎博士が天城山に御出でになり、大村君と私が御供かたがた道案内申上げた。紅葉の最盛りであるが、暖かい伊豆のことで、沢山の収穫があり、博士は大いに喜ばれて、「関西でも

こんな豊富の植物相はない位に立派」と申された。

昭和34年5月に伊豆半島自然観察隊が編成された。天城山の植物や鳥の自然の様子を観察し、併せて保護の対策に資する目的である。植物班は本田正次博士を班長に九里聡雄氏と勝又徹二氏と私がお供した。博士は「墨のらくがき」に調査の一端を記されたが、「天城山は植物の豊庫である。美しい花のシャクナゲの自生地は至急保護せねばならない。スカイライン予定地には学術上貴重の植物がいっぱい生えているためその建設には問題がある。」と強調された。

昭和35年東京営林局は植物の豊庫である伊豆半島の植物を調査して世に知らせるため、同局の佐藤潤平博士と小生に実地調査を依頼された。その結果は「伊豆の植物」として昭和37年に出版した。

文化財の県の仕事をしていた私は、天城山のシャクナゲ群落を天然記念物に指定することに私費まで使って走り回った。林野庁へお願いした所、幸いに地域を定めて承諾を受けたので、地元の町村から申請書を出すことになった。ここまで事が進んだことについて、勝又徹二氏の御協力に感謝したい。このようにしてやっと地元の申請書が県へ送られたものではあったが、不思議なことにその書類はどこか途中で消えてしまい、県教育委員会へは届かなかった。林野庁や営林署の役人もその後は全部代ってしまったから、始めからやり直しである。

かしこくも天皇陛下が行幸御聖覧なされた点を記念すると同時に、また多くの著名学者が申された御教訓や天城山についての御感想を生かすため、後世まで永く天城山の自然を固く守り抜いて行きたい。

5 植物地理のあらまし

天城山の分布要素を次の7群に分けてみる。

(1) 暖地性要素 シダ植物の亜熱帯性のものもここでは含めた。とくにシダ植物が多く、その内で北東限のものが多い。北限という意味をただ緯度だけでなく、分布の進行方向の限界として北東限という言葉を用いたい。たとへば南日本から進んだものが伊豆と岐阜県にあった場合、北限は緯度では岐阜県であるが、北東限として緯度に関係なく進行方向で定めると、伊豆が限界となる如くである。房総半島又は北関東、又は宮城県南部沿岸と北限は個々の種類によって違うが、伊豆半島は分布の滝として、伊豆で限界となるものが相当多い。ウバメガシ、バリバリノキ、クロバイ、ヤナギイチゴ、カギカズラ、センリョウ、フウトウカズラ、オオバヤドリギ、ルリミノキ、タイミンタチバナ、シタキシソウ、ジュズネノキ等の樹木はおおむね房総半島、相模南部などが北限である。シダ類ではナンカクラン、リュウビンタイ、シロヤマゼンマイ、オオコケシノブ、リュウキュウコガネ、タカサゴキジノオ、シマイワヒメワラビ、エダウチホングウシダ、オトコシダ、ヤマグチカナワラビ、ユノミネシダ、シンテンウラボシ、イワヒトデ、タカノハウラボシ、コウラボシ、ナガバコウラボシ、イズヤブソテツ、ウスバミヤマノコギリシダ、イヨクジャク、コクモウジャク、ニセコクモウジャク、ヌカイタチシダ、ヌカイタチシダモドキ、ムラサキベニシダ、ホウノカワシダ、ヒロハアツイタ、ハチジョウカグマ、ハイコモチシダ、クルマシダなどは伊豆が北限である。

草本では関東の暖地を北限とするものが多いが、伊豆を北限とするものでは、エンシュウハグマ、シノノメソウ、ミツバテンナンショウその他がある。

北限性のもので紀伊半島又は以南からとび越して分布するものが若干ある。シロヤマゼンマイ、ジョウレンシダ、シノノメソウ、ノグルミ、エンシュウハグマ、コガクウツギ、その他がある。とくにモクレイシの飛越分布は著しい。一名隔離分布ともいう。

(2) 亜寒帯要素 日本北地に多く、中部以南では高地に残る。

オノエラン、ミサヤマチャヒキ、シラネワラビ、オオバシヨリマ、ナライシダ、クサソテツ、フクロシダ、コタニワタリ、ミヤマヌカボ、キソチドリ、ヤマオダマキ、オノエヤナギ、エゾエノキ、クロクモソウ、ヤマブキシヨウマ、イヌエンジュ、ドクウツギ、アサノハカエデ、テツカエデ、マルバイチヤクソウ、ヒメイワカガミ、ミヤマイボタ、トネリコ、オオキヌタソウ、マルバダケブキ、ヒロハハネガヤ、ヒロハテンナンショウ、オクノカンスグ、ゴンゲンスグ、エゾハリイ、エンレイソウ、カキツバタ、ショウキランな

どが知られている。

(3) **ソハヤキ要素** 中央構造線以南の地域（九州，四国，紀伊半島南部等）の要素で，日本海に面する内帯には見られないものである。もし瀬戸内沿岸にあったとしても，ごく稀にしか見ない。コガクウツギ，シノノメソウ，イワユキノシタ，ミツバコンロンソウ，ヒメシヤラ，ヒコサンヒメシヤラ，ホソバスマイレサイシン，シコクスミレ，ミヤマウコギ，イワナンテン，ヒカゲツツジ，タニジャコウソウ，ヤマジオウ，オカタツナミソウ，テバコモミジガサ，ナベワリ，タテヤマギク。

(4) **本州外帯要素** 関東，東海道の多く，ときに紀伊半島に達し，甲信に入っても，あまり北には見ない。シバヤナギ，タマネコノメ，キョスミミツバツツジ，トウゴクミツバツツジ，アシタカジャコウソウ，シロバナイナモリソウ，テイショウソウ，エンシュウハグマ，キョウマルシヤクナゲ，キンレイカ，ウラハグサ，スルガテンナンショウ，フジイバラなど。

(5) **本州中央要素** 本州中部，関東に広く分布し，ときに近畿の東寄りに，或は東北地方の南寄りまで広がるものもある。タマアジサイ，ヤマユリ，ヤマホタルブクロ，コシノコバイモなど。

(6) **フォッサマグナ要素** 前川博士のいわゆるフォッサマグナ地域，富士山とその周辺，箱根丹沢山集，三浦及房総半島，伊豆半島に分布する。伊豆七島又は北進して八ヶ岳，千曲山脈に達するものなど，個々の種類により多少の分布差がある。ハコネコメツツジ，オトメアオイ，ランヨウアオイ，ハコネシログアネソウ，マツノハマネンゲサ，ヒトツバシヨウマ，フジアカシヨウマ，マメザクラ，サンショウイバラ，ハコネグミ，サクラガンピ，ムラサキツリガネツツジ，イヌヤマハツカ，イガアザミ，キントキシロヨメナ，ミヤマウツギ，タンザワザサなど。

(7) **伊豆半島固有要素** 伊豆半島のみに見えるもの，ときに箱根山脈の南部に達する。アマギカンアオイ，ナガバミズヒキ，アマギニシキウツギ，イズカニコウモリ，ナガバマムシグサ，アマギイワギボウシ，アマギアマチャ，アマギツツジ，など。ここで注意したいことは，伊豆で最初発見されたが，その後他の地域にも分布することが判ったものが若干ある。イズコメグサ，アマギザサ，イズヤブソテツなどはその例で，この要素から除かれる。また他種に併合又は異名となったものも同様で，コアオスズ（タンザワザサ），イズカンアオイ（ランヨウアオイ），アマギユキモチソウ（ユキモチソウ），イズテンナンショウ（オオマムシグサ），オオナガバマユミ（マユミ），アマギイチリンソウ（ニリンソウ）がある。

また間種のため，植物地理上では扱いかねるものに，イズアカガシ，イズイヌワラビ，イズホンモンジグサ，カタキノデモドキ，アマギイノデ，イズコモチシダなどがある。

付：**伊豆七島要素** 伊豆七島に多いもので伊豆半島の一部にあるが移入したらしいものである。オオシマザクラ，ハチジョウグワ，ハチジョウアキノキリンソウ，コハクサンボクをあげる。後の3種は伊豆の沿岸に生えるので天城山に見ない。

伊豆の採集品をタイプとして記載した原産地のものが沢山ある。必ずしも伊豆固有ではないが，分類学上重要であるから，その地点は永く大切に保存すべきである。

天城山の植物中には和名にアマギ何々，イズ何々，また学名に *amagiensis*, *izuensis* の名のつくものが若干ある。必ずしも伊豆に多いとは限らないが，この地の植物に接して来た者にはなつかしい存在である。たとえばアマギツツジ，イズテンナンショウ，イズカニコウモリ（学名に *amagiensis*），イズコメグサ（学名に *idzuensis*）などの如きものがある。

6 天城山に生ずる主要植物の解説

(1) 針 葉 樹

1 スギ *Cryptomeria japonica* D. DON スギ科

スギは日本で最も広く用材として建築，器具，その他頗る用途が広い。天城山には野生木が今も残っている。最大のものはナメ沢にある太郎杉で樹高40m，目通り周囲9.6m，この外にも国有林内の所々に存在し，営林署の保護の下にある。天城山の植林は全国でも名高い良材で知られ，江戸時代に植えた御礼杉も残

っている。

2 ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* ENDL. ヒノキ科

天城山国有林の一部にヒノキの自生が残っている。河津、仁科、東伊豆、中伊豆の数ヶ所の海拔400～840mの所に、スギ、カシ類、モミ、アカマツなどと混生する。国有と民有の山林にも植林が多く、発育は良好で材質が上等である。

3 モミ *Abies firma* SIEB. et ZUCC. マツ科

天城山の国有林の保護区域にやや多く残存し、海拔400mから800mの間に他樹と混生する。浄蓮、桐山、本谷、地蔵堂、寒天、白田、萩野入その他に多く、大なるものは高さ35m、目通り周囲7.5mに達する。

4 カヤ *Torreya nucifera* SIEB. et ZUCC. イチイ科

カシ林に混生し、古くから良材を産したが、今は大方伐採されてその残りは僅かである。雌雄別株で、雌花のみ結実するので、どこでも雌木が残されて、種子を食用や油用とする。大木の材は基盤に賞用される。

(2) 常 緑 広 葉 樹

5 スダジイ *Castanopsis cuspidata* SCHOTTKY ブナ科

シイに2種あるが、スダシイはコジイよりも材質が上質で、果実も大きい。半島にはスダジイが多い。通常500m以下に生じ、神社の森などに巨大のものが残っている。

6 アカガシ *Cyclobalanopsis acuta* OERST. ブナ科

カシ類中で最も幹が太くなる。材は最も堅い。海拔300m～800mに多く生える。葉柄が長くて葉は全辺で、生長すると全く毛がなくまた白味がない。アラカシと交配したものをイズアカガシといい、牧野富太郎博士により伊豆で発見された希品。ツクバネガシと交配したものがオオツクバネガシで天城山などに点々と稀生する。その葉の細い一形をヒメアカガシといい、稀に生える。

7 ウバメガシ *Quercus phylliraeoides* A. GR. ブナ科

普通海岸に生じるものであるが、伊豆の西側外洋面では山地に多く上って行き、高い所では800mまで達する。生長がごく遅く、為に材がごく堅い。太平洋に面する地方に多く、三浦半島が北限で南は沖縄島に達し、中国南部沿岸にも生ずる。日本海側には無く、瀬戸内海でも少い。外帯要素。方言バメ、イマメ。

8 ヤマグルマ *Trochodendron aralioides* SIEB. et ZUCC. ヤマグルマ科、

山中の岩の多い所に生えるので、尾根や谷間に見る。高い所は片瀬峠の近くに巨木を見た。低い所では湯ヶ島あたりにある。樹皮からトリモチを製する。モチノキ科とは縁が遠く、花は全く違う。葉は枝の先に集りつき車輻状に見える。葉の細長い品種ナガバヤマグルマも混生する。方言モチノキ。

9 ツゲ 一名 アサマツゲ *Buxus microphylla* var. *japonica* REHD. et WILSON ツゲ科

この木は日本では蛇紋岩の地質の所に多く生えるものだが、天城山のツゲ峰など尾根通りの安山岩の所に生えることは生態的に珍らしい。生育が遅くて、材質が緻密で美しい。昔からクシを作ったり、印材に賞用する。庭木や生垣などにも用いる。天城山のは岩の間に生えるので移植できない。保護したいものである。

10 モクレイシ *Microtropis japonica* HALL. ニシキギ科

伊豆の沿岸地方に多く生えるが、中伊豆の地蔵堂あたりにも稀生する。分布上は伊豆七島と九州南部から以南の列島に多く、東海道以西、四国、九州の北部に見ない。隔離分布のよい例である。材として役に立たないものであるが学術(分布)上貴重である。

11 バリバリノキ 一名 アオカゴノキ *Litsea acuminata* KURATA クスノキ科

葉はササ形でもっと厚く光沢がある。浄蓮、萩野入、大沢里、松崎奥などにごく稀に見る。分布は房州が東限で北限は湯河原あたり、南日本から沖縄列島をへて台湾、中国南部に達する。別に有用とはいえないが、分布上で珍しく保護したい。

12 バクチノキ 一名 ビランジュ *Prunus Zippeliana* MIQUEL バラ科

葉が大きくチャに似ていて、葉柄に蜜腺があるのでサクラ属の特徴が判る。樹皮は剥げてなめらかであ

る。前種と同様の分布をしているが、もっと海岸よりに生える。葉からバクチ水をとってせきの薬に用いる。

13 ミヤマトベラ *Euchresta japonica* HOOK. マメ科

亜低木で、高さ50cmぐらい。葉は三出して厚い。夏白い蝶形花をつけ、果実は肉質長楕円形で黒紫色に熟し、マメ科の他のものと著しく違う。熟しても割れない。栃木茨城県界の仏頂山が北限で、九州までの暖い地方の山中に生える。根を薬とする。

14 ツバキ *Camellia japonica* L. ツバキ科

伊豆半島には低山に多く、沿岸の林地には群生地もあって冬から早春には美しい花がながめられる。天城山では800mまで上って生える。とくに河津方面に純林があったが伐採された。この科のヒサカキ、サカキも伊豆に多くツバキと同じ分布を示す。

15 シャクナゲ *Rhododendron Metternichii* var. *kyomaruense* YAMAZAKI ツツジ科

学者によりキョウマルシャクナゲ一名アマギシャクナゲという。あるいはアズマシャクナゲであるという。キョウマルとすれば伊豆半島と遠江北部から長野県下伊那地方に分布する。伊豆では東天城、西天城、南天城の各800m以上に多いが、内側ではもっと低下して生えることもある。通常尾根の北側に面して多く生えるものである。天城山のものは木の高さが5mにも達し、花は濃いものから淡いものや純白のものが混生し、ごく稀に花冠が6又は7に切れる株も見た。学術的にも珍しいものであるが、登山者にも美しく喜びを与える花木であるから大切に保護すべきものである。近年登山者や業者が盗んで行くものがあって幼木を見なくなった。幼木の無くなることは、次の世代の後つぎの無い点で心配である。もし自動車を通じれば、登山者などがつい手を出して花枝を折ったり、植木屋が金もうけの為に盗木される心配も多くなる。移植しても活着困難である。

16 ササ類 *Sasa* spp. イネ科

天城山の八丁池付近の高い所にはアマギザサが多い。本種は筆者の標本をタイプとして牧野博士が命名したもの。西天城の尾根すじにはコアオスズ（タンザワザサと同一という）が群生する。中腹に生えるものはスズダケである。スズダケは行李などを編むによい原料である。これら3種は日本の外帯に生じ内帯には見ない。

(3) 落 葉 広 葉 樹

17 オノエヤナギ *Salix sachalinensis* FR. SCHM. ヤナギ科

伊豆半島に数種のヤナギ類があるが、多くは低い所に生える。本種とバッコヤナギの2種は天城山のやや高くまで生える。もともと本種は亜寒帯のもので、カムチャッカ、東部シベリヤ、千島、サガレン、日本では四国と対馬が南限で九州には見えない。本州でもかなり高い山に生える。天城山のような暖かい所に生えることは分布上珍しい。別に役に立つ木でないが植物生態学上で大切。

18 ノグルミ *Petrophiloides strobilacea* REID クルミ科

葉はクルミの様だが果実は全く違ってカバノキのあるものに似ている。天城山の北側にごく稀生する。近畿地方以南から九州や朝鮮の南部に多い木である。ほとんど北限といって良い。

19 ブナ *Fagus crenata* BLUME ブナ科

天城連山の600m以上に多く、とくに尾根すじの自然林には純林又はカエデ類と混交林をなしている。これは垂直分布の指標植物であるから大切にしたい。樹皮にはいろいろの着生植物が着き、野鳥が多く棲んでいる。昔は役に立たない木として見すてられていたが、今ではある方面の利用が多くなった。しかし材質はもろくて腐りやすく、建築物などには全くだめである。この林相は誠に美しい。

20 ケヤキ *Zelkova serrata* MAKINO ニレ科

広葉樹中で最も材質が堅く、建築、器械、彫刻など用途が多い。早く成長した木は心材が狭く、軟弱部が多くツキといって価が安い。天城山では谷すじに多かったが大方伐られて、今は少なくなっているが、方々に巨木が僅か残っている。

21 カツラ *Cercidiphyllum japonicum* SIEB. et ZUCC. カツラ科

谷すじの奥地を好み、大木は残りが少ないが本谷すじには巨木が残っている。葉は丸い特別の形を呈する。この本幹を切ると、横から沢山の芽が出て、ぞく生する木振りとなる。

22 コガクウツギ *Hydrangea luteovenosa* KOIDZ. ユキノシタ科

低木である。東海道では伊豆半島の方に生じ、しかも沢山生えている。紀伊半島、山陽地方、四国、九州本島に生え、台湾にもある。紀伊半島から飛び越して天城に多いのは隔離分布の例である。これとコアジサイとの自然雑種をヒメシバアジサイ一名アマギアジサイといい、牧野博士の発見より早く私は採集した。

23 アマギアマチャ *Hydrangea serrata* var. *angustata* SUGIMOTO 同科

天城山の谷すじの木の下に多い。古くアマギといい甘茶を作って甘味料にしたので、天城山の名ができたという。伊豆半島から箱根山の一部に特有で、ヤマアジサイよりも葉が細くて、甘味が多い。

24 マメザクラ *Prunus incisa* THUNB. バラ科

古くハコネザクラ、方言コメザクラ。サクラの一種で、木も小さく、葉も花も小さい。フォッサマグナ要素で分布は伊豆半島、房総、箱根、足高、富士山と周辺、丹沢山、秩父山集、八ヶ岳、甲州の各山、信州南東部に分布し、北は日光の一部と筑波山に達する。静岡県では富士川以東に多く、以西に一本も見ない。雑種ができやすく、ヤマザクラとの雑種のマメヤマザクラも天城山に稀生。エドヒガンと交雑してコヒガンザクラができ、富士山麓の古寺に見る木は天城山から移したといわれる。伊豆で別荘地、観光地などを開発するときはブルドーザーにかけないで残して頂きたい木である。

25 エドヒガンザクラ *Prunus spachiana* KITAMURA form. *ascendens* KITAMURA バラ科

谷すじに点在する。このサクラは花が葉よりも先に開き、花卉も細いし、がくも中部がくびれて毛が多い。これの枝垂れとなったのがシダレザクラである。この木とオオシマザクラの雑種がソメイヨシノザクラ *Prunus yedoensis* MATSUMURA である。竹中博士の実験で間の子である点が確認され、氏の説では伊豆半島が自然交配した原産地という。江戸の染井の植木屋がこれを江戸で接木として殖やして世に広めたという。

26 オオシマザクラ *Prunus lannesiana* var. *speciosa* WILSON バラ科

ヤマザクラに似ているが、花は大きくて白い。葉も大きくて裏に白味が無い。半島のものは伊豆大島から昔移植したとも、沿岸に野生があったともいわれる。サトザクラは多くこの木から改良されたものである。伊豆にはオオシマザクラの色の濃いものや、八重に移り行く過程の株がある。

27 フジキ *Cladrastis platycarpa* MAKINO マメ科

枝葉だけではフジによく似ているが、高木で幹も大きくなり、つるでない。花は白いが咲くことは珍らしい。天城山の各谷すじに点在する。方言ユクという。ミヤマフジキをユクノキというのはまちがいであるという。ミヤマフジキは天城山に見ない。

28 カエデ類 *Acer* spp. カエデ科

天城山にはカエデ類が多い。八丁池周辺にはオオイタヤメイゲツが多い。天城主峰から軽石沢の自然林にはテツカエデ、ホソエカエデ、アサノハカエデ、カジカエデなどが生えている。谷すじにはヤマシバカエデの多い所、イロハカエデ、オオモミジの多い所、西天城の中腹にコミネカエデの多い所がある。これは秋の紅葉が燃えるように赤くなる。

29 ヨコグラノキ *Berchemia berchemii* folia KOIDZ. クロウメモドキ科

石灰岩を好み、静岡県では天城山と榛原郡女神山にだけ稀生する。牧野博士が四国横倉山で最初見つけたものである。宮城県と新潟県が北限で、隠岐、四国、九州、朝鮮（忠北道）、中国（湖北省）に分布する。天城山では本谷と白川入だけに見つかっている。石灰岩でない所に生ずる事は面白い。葉が二つ交互に互生する特性がある。これをコクサギ型葉序といい、コクサギ、ケンボナシ、ニッケイ、ヤブニッケイ、ヤコウボクなどに限り見られる。

30 サクラガンピ *Diplomorpha pauciflora* NAKAI ジンチョウゲ科

高さ2～3mの細い木、樹皮が丈夫で、これをすいて紙を作る。江戸時代に熱海、修善寺で半紙をこの原

料ですいたものである。伊豆の山地一帯と箱根山だけの固有品である。

31 ドウダンツツジ *Enkianthus perulatus* SCHNEID. ツツジ科

主に蛇紋岩の地に多く生え、庭木や生垣によく植える。天城山は蛇紋岩でないが、この木が西天城山脈の尾根に群生する。ヒロハドウダンとして区別する人もあるが、自生品に葉の広狭の変化があつて区別できない。静岡県下では他に島田市北部と引佐郡の蛇紋岩地に群生している。分布の東限である。

32 アマギツツジ *Rhododendron amagianum* MAKINO ツツジ科

葉は3枚づつ生じ、葉柄が短く黄色毛が生えている。花はずっと遅く6月に咲きヤマツツジと同色である。牧野博士は湯が島小学校教員の採集した標本で命名した。同じ年に中井博士、前川博士の一行も採集した。天城山の尾根に多く、日金山や達磨山にもごく稀に見る。移植しても活着困難である。

33 ハコネコメツツジ *Rhododendron tsusiophyllum* SUGIMOTO 同科

天城山頂の岩壁の人の行けない岩の間に生えている。ツツジ属とは別属とし世界に1属1種と見る学者もあるがコメツツジなどと類縁が近いものである。産地は秩父山集、丹沢山集、箱根山、富士山とその周囲の山(足高、毛無、三ツ峠)、七島(神津、三宅、御蔵)と伊豆半島に分布する。フオッサマグナ要素の代表である。南アルプスからの報告はチョウジコメツツジの見まちがいであつて南アには見ない。越中二沢岳の報告もそんなものであろう。花がなくても葉の裏を比べてみると相違がわかる。

34 サラサドウダン *Tritomodon campanulatus* F. MAEKAWA ツツジ科

高さ3~5mぐらいの木、富士宮市天子岳の伝説のヨウラクツツジはこれである。天城山尾根すじに多く、赤味のある本品と白味の(いくらか黄緑味がある)シロフウリンツツジとあつて、後者が多い。

35 チチブドウダン *Tritomodon cernuus* var. *rubens* HONDA emend SUGIMOTO 同科

前種によく似ているが、花はふちが細菌に切れて赤色である。西南日本に多いベニドウダンとはがくの形が違うので変種とする。関東から本州中部のものはみなこの変種で、ベニドウダンは近畿地方から西南に分布している。マキシモウィッチ氏の *rubens* の名は箱根山が産地であつて、箱根山のはみなチチブドウダンで、本物のベニドウダンは一本も見ない。

36 シシンラン *Lysionotus pauciflorus* MAXIM. イワタバコ科

ごく小形の着生木で常緑である。夏に筒形の花が咲く。天城山にはこの着く木は1本だけ知られ、分布の北限である。紀伊半島、山陰、四国、九州、屋久島、奄美、沖縄に分布し中国にもある。

37 ヒロハコンロンカ *Mussaenda shikokuana* MAKINO アカネ科

低木でぞく生する。伊豆では天城山南麓に2ヶ所だけ生えている。近年行って見て無くなって居るのでビックリした。分布の北限で、紀伊半島、四国、九州、種子島から琉球列島をへて台湾に達し中国にも多い。この木は花の萼片の1つが白くて大きくなって花卉の如く見えるのが特長である。

38 アマギウツギ *Weigela decora* var. *viridiflora* HARA スイカズラ科

ハコネウツギに似て、花はもっと筒部が細い。三形ありて、1ははじめは白く後に赤味のつくアマギニシキウツギ、2ははじめから赤いアマギベニウツギ、3ははじめから白く変色しないアマギアオウツギである。この仲間はサンシキウツギ、ハコネウツギ、ミヤマウツギなども3形の花色をもち美しい。

39 ミヤマシグレ *Viburnum urceolatum* SIEB. et ZUCC. 同科

かなり涼しくやや高い山に生えるもので、通常幹は伏している。天城山にも稀生するが長九郎山あたりは雪が少いので、幹は立っている。幹が立つものを変種ヤマシグレといい、四国、九州、屋久島のものと区別されるが、近畿と中国山脈ではその連絡するものを生じ、区別する程よく判らない。

(4) 草 本

40 ミヤマツチトリモチ *Balanophora nipponica* MAKINO ツチトリモチ科

ブナ帯の自然林の落葉木(ブナ・カエデ類)の根に寄生する。外見はキノコと見まがう位の奇妙の形で、赤い頭状花序を地面から少しのぞかせている。明治16年大久保三郎氏が天城で採集した。氏は6月16日に採り、まだ幼時であつた。花季は8月下旬である。

41 アマギカンアオイ *Heterotropa Muramatsui* F. MAEKAWA ウマノスズクサ科

カンアオイの1種、花の形は東京都西部にあるタマノカンアオイによく似ているが、葉面にしわが多く、葉柄が緑色の点が違う。1927年村松七郎氏が天城山で見出した。天城山一帯に広く産し、北は玄岳あたりから南は白ヌタ池付近、西は棚場山に達する。

伊豆半島はカンアオイ類に富み、ランヨウアオイ（イズカンアオイ）、カンアオイ、オトメアオイ、シイノミカンアオイ、スエヒロアオイ、アシタカカンアオイ（ジソウカンアオイ?）などがある。

42 ナガバミズヒキ *Antenoron filioforme* var. *smaragdium* HARA タデ科

ミズヒキの変種で葉が細く、果実も細いもの、伊豆半島固有。一形のマルバミズヒキは葉が円形に近く質がうすいもので天城山に稀生する。

43 ヤマオダマキ *Aquilegia Buergeriana* MIQUEL キンボウゲ科

オダマキに似て、萼は褐赤色で、葉裏と子房に軟毛がある。亜高山性のもので、伊豆半島にも稀生し、天城山脈の一部にある。天城山で発見されてアマギイチゲというものはニリンソウの瘦せた一形といわれる。

44 マツノハマンネングサ *Sedum hakonense* MAKINO ベンケイソウ科

マンネングサの1種、深山のブナなどの樹上に着生し垂れ下がり、淡黄色四弁の花が咲く。天城山にまれに見る。産地は秩父、丹沢山、富士山とその周辺、安倍川上流、箱根、足高山に分布する。フォッサマグナ要素。

45 フジアカショウマ *Astilbe Thunbergii* var. *fujisanensis* OHWI ユキノシタ科

これもフォッサマグナ要素で、丹沢山、箱根、愛鷹山、三ツ峠山、金時山と天城山に分布する。全草赤味のある軸と光沢の強い心形の葉などでアカショウマと区別できる。

46 イワユキノシタ *Tanakaea radicans* F. et S. ユキノシタ科

天城山脈の西半に分布し岩壁に生える。伊豆では明治時代に松村博士などにより採集され、オオヤマユキノシタという変種とされたこともあるが、そんなに違ってはいないと思う。伊豆、相模、甲斐、駿河、遠江、信濃（南端）に産し飛び越えて四国の南部に生える。雌雄別株で、走枝を多く出し苗で殖える。花卉がない。

47 フジダイゲキ *Tithymalus Watanabei* SUGIMOTO トウダイグサ科

富士山麓で発見されて牧野博士の命名したものである。ノウルシ、タカトウダイなどに似ているが、茎が太くて葉は多数密生し、果形などが違っている。私は天城山北麓で採集した。伊豆駿河の狭域のみに固有、駿河では静岡市の大山、高草山に産する。いずれもススキの生えた草原に生ずる。

48 シノノメソウ *Swertia swertopsis* MAKINO リンドウ科

葉と花はアケボノソウに似ているが、花は葉のわきに生じるので全形が全くちがう。天城山の中腹の数ヶ所に稀生する。分布は伊豆からずっと遠くはなれた四国と九州に産し、隔離分布の一つで、ソハヤキ要素である。

49 アシタカジャコウソウ *Chelonopsis Yagiharana* HISAUTI et MATSUNO シソ科

ジャコウソウに似て、もっとぞく生し、茎の一部に4葉が接近して輪生状の部分がある。葉と花はもっと小さい。上野、武蔵、相模、甲斐、伊豆、駿河、遠江、南信、とんで四国（阿波、伊予）に見る。とくに足高山や富士山周辺の山に多い。ジャコウソウと同一とする学者があるが、はっきり区別ができるものである。

50 イズコゴメグサ *Euphrasia Inumae* var. *idzuensis* OHWI ゴマノハグサ科

コゴメグサの仲間はごく小さい一年草で、移植ができない。花と葉の僅かの形のちがいで区別され、狭い地域毎に違ったものとなっている。本種は武田久吉博士が伊豆の日金山、修善寺などで採集したもの。分布は伊豆と駿河の西端から遠江をへて、三河の東半に分布し、相模の小涌谷にも知られた、東海地方要素である。富士山とその周辺に見ない事は一寸不思議である。伊豆では山地に広く分布している。

51 サツマイナモリソウ *Ophiorrhiza japonica* BL. アカネ科

谷のしめった所に生える小草。生のときは緑色の葉と白い花が咲くが、乾くと全体が赤く変色するので、標本だけ見ると赤い花と感じがいい。分布は房総、箱根および天城山の一団と少し飛んで近畿の一部と

本州西端に及び、四国、九州、屋久島と沖縄に分布する。とびとびの分布で面白い。

52 キンレイカ *Patrinia triloba* var. *palmata* HARA オミナエシ科

天城山の尾根に生える小草で夏黄色い花が咲き、高山植物という感がある。乾くと悪臭があることはオミナエシと同じで同じ仲間である。産地は関東から甲信地方の南半、東海道、南アルプス、富士山や周辺に多く、ブナ帯に生える。近畿地方にも多く生ずる。之をハクサンオミナエシというのは間違いである。白山のものは別で東北地方（鳥海南、朝日岳）から北陸、北関東、信州北半（南は御岳、小秀山まで）、の亜高山帯に生え、キンレイカよりも垂直的に高い所である。ハクサンオミナエシは後者である。

53 エンシュウハグマ *Ainsliaea dissecta* FRANCH. et SAVAT. キク科

天城山のごく一部に僅か生えている。主な産地は駿河（西端）、遠江（南半の山に多い）、三河（広く分布）、とんで伊勢菰野に知られる。東海道の要素である。もし天城に無ければ伊勢湾を囲む伊勢湾要素であるが、どうして伊豆に飛んだか不思議である。

54 ミヤマギク *Aster viscidulus* MAKINO キク科

ノコンギクに似ているが、総苞がねばる性質がある。天城山、遠笠山の尾根の岩場に少し見る。北関東の日光、清水峠から秩父山脈、丹沢山、箱根富士山と周辺の山、伊豆、南アルプスに分布する。トウガサギク *A. Katsumatai* はたぶん本種とシロヨメナ系のものとの雑種で、遠笠山頂で勝又徹二氏の発見したもの。

55 イズカニコウモリ *Cacalia amagiensis* KITAM. キク科

高山にあるカニコウモリに似ている。茎には2枚のフキに似た葉がつく。頭状花はカニコウモリと異り直立している。系統的にはカニコウモリよりもヤマタイミンガサに近縁である。私が天城山の与一坂から上った所で最初とり、次は猫越峠や万三郎岳でとった。東側山麓の八幡野方面では低くに生えている。伊豆天城山脈固有である。スカイラインに多いので道ができると減る心配がある。

56 ミヤマヌカボ *Agrostis liaccida* HACK. イネ科

南千島から屋久島やでの高山帯と亜高山帯に分布する。天城山最高点の岩地に稀生したのを採った。遺存していた点は興味がある。

57 ミサヤマチャヒキ *Helicotrichum Hidewoi* OHWI イネ科

カラスムギに近似した多年草で、それより花が小形。天城山で羽田勲氏が採集した。本種は長野県の千曲山脈、八岳、釜無山脈のブナ帯の林下に生ずる稀品。フォッサマグナに沿って南北に分布するもの。富士周辺や箱根丹沢山集に見えない点は何かの原因があると思う。

58 ミツパテンナンショウ *Arisaema ternatipartitum* MAKINO サトイモ科

葉は3小葉あること、球茎から地下走茎を出すことなどで著しい。私は猫越峠で採集した。駿河、遠江などでも採集され。四国、九州に分布するもので分布の北限である。

59 ナガバマムシグサ *Arisaema undulatifolium* NAKAI サトイモ科

天城山脈のみに達する固有種。葉は2個で小葉は線形で辺縁が波曲し表面は光沢が強い。中肋は白斑があるのが多い。天城山はこの属の豊庫で次のものがある。

ホソパテンナンショウ、コウライテンナンショウ、ツクシマムシグサ、ヒトツパテンナンショウ、クロハシテンナンショウ、カントウマムシグサ、ユキモチソウ（アマギユキモチソウ）、オオミネテンナンショウ、ヒロハテンナンショウ、オオマムシグサ（イズテンナンショウ）、ウラシマソウ 計12品

60 アマギイワギボウシ *Hosta longipes* var. *latifolia* F. MAEKAWA ユリ科

天城山の尾根の自然林の大木上につく、イワギボウシの変種で葉は広くて円心形。まれに白花がある。伊豆固有。

61 カキツバタ *Iris laevigata* FISCH. アヤメ科

天城山の八丁池に生ずる。本種は中部以北の水辺に生じ、以南の暖地には稀である。近年八丁池が開発されて、宿舎や小舟などのため絶滅の寸前にある。なおノハナショウブも同じ所に生えている。

62 ハコネラン *Ephippianthus Sawadae* OHWI ラン科

コイチョウランによく似ているが、もっと低い所に生える。天城山に稀生する。分布は秩父、丹沢、箱

根、富士山、愛鷹山などフォッサマグナ地帯が本拠のように見えるが、安倍川上流の安倍峠と大和大台原山にも見つかっている。本州外帯要素。

63 ハクウンラン *Vexillabium Nakaianum* MAEKAWA ラン科

学者により分類上の異説がある。命名者の前川博士に従えば東北地方、越中、相模、駿河（富士山）、伊勢、山城、とんで九州の豊後、コシキ島および朝鮮に分布する稀品。伊豆では西天城の尾根で採集された。

64 キバナノショウキラン *Yoania amagiensis* NAKAI et MAEKAWA ラン科

無葉の腐生植物、全体が淡黄色で、花はショウキランに似て黄色をおびる。1931年天城山で中井、前川両博士によって発見されたが、今では、関東から九州（大隅まで）に至る外帯に点々と稀生することが判った。

(5) シ ダ 植 物

天城山を中心に伊豆半島のシダ植物は頗る豊富である。多くの植物学者、採集家などによって、最近までに沢山のシダの分布が判ってきた。とくに分布の東北限として多数のものがある。

65 ナンカクラン *Lycopodium Hamiltonii* SPRING ヒカゲノカズラ科

スギランに似ているが、岩壁や大木に着いて垂れ、葉は少し広くて左右に開いている。伊豆では益子進氏によって河津の谷の岩上で1株発見された。これは亜熱帯性のもので、日本では八丈島、沖縄列島の各島に分布し、台湾、インドネシア半島、フィリピンよりインドに及ぶ。分布の北限で、遺存亜熱帯要素である。残念ながら今は見ない。

66 リュウビンタイ *Angiopteris lygodiiifolia* ROS. リュウビンタイ科

地上に生ずる巨大なシダで人頭より大きい塊状の幹と、2～3mに達する葉とで壮大である。明治中頃に武田久吉博士により八幡野で群生が見つけられてから、今は天然記念物に指定された。他に西岸の加茂村にある。本州では遠州、伊勢、紀伊に稀生する亜熱帯の要素。四国、九州、琉球列島、台湾に分布する。

67 シロヤマゼンマイ *Plenasium banksiaefolium* PR. ゼンマイ科

塊状の大い幹、1m余の常緑の剛い葉などとてもゼンマイとは似つかない。賀茂村に数株残るだけ、紀伊、土佐、九州、琉球列島、小笠原に産し、台湾から東南アジア地方にかけて多く分布する。

68 ユノミネシダ *Histiopteris incisa* J. SM. ワラビ科

葉は大形で柄を入れると2mに達する。伊豆西岸の山地数地点に沢山群生する。紀伊の湯の峯で見つかったが今は絶滅に瀕する。琉球列島、小笠原、台湾、東南アジア各地に広く分布し、豪州、アフリカ、ヒマラヤにも及ぶ亜熱帯要素である。

69 ハイコモチシダ 一名 ジョウレンシダ *Woodwardia unigemmata* NAKAI シシガシラ科

大形のシダ、岩壁に生えて長さ2～3mとなり垂れて先に芽を生じ、芽が地について新しい苗ができる。伊豆浄蓮滝で久内清孝氏が発見した。今は天然記念物として県が指定保存する。伊豆では仁科の谷に沢山生え、その他に河津、湯ヶ島にも少し見る。分布は亜熱帯性で、ヒマラヤ、印度シナ半島、フィリピン、台湾、チベット、中国の中部から南部に広く分布、日本では肥後と薩摩に知られ、隔離分布し北限。

70 ミゾシダモドキ *Thelypteris omeiensis* CHING オシダ科

ミゾシダに似ているが、ソーラスは小円形で、羽片の基着部に突起物（気孔の役目をするもの）がある。はじめ浄蓮滝で児玉親輔氏が見つけ新種として学名に伊豆の意味をとり *izuensis* の名をつけた。その後分布がもっと広く、中国の中部と南部、台湾にも判り、北限は房州で、本県では静岡市や遠江南部にも見つかっている。本州と九州でも産地は稀である。

71 ツクシイヌワラビ *Athyrium Kuratae* SERIZAWA オシダ科

アリサンイヌワラビに近いもので、近年までそれと混同視されていた。分布は伊豆数カ所、八丈島、本州西端、四国、九州、屋久島、台湾に生える。

72 アマギシダ 一名 クルマシダ *Asplenium Wrightii* EATON トラノオシダ科

暖地性で谷すじの岩壁などに群生する。伊豆では天城山周辺の谷の各所に生える。日本の暖地から、台

湾、南中国、フィリッピン、インドシナに達する。明治のはじめ植物学者によりクルマシダの名を得たが、江戸時代の古書にアマギシダの名がつけられて居ることが判った。

73 オオバショリマ *Thelypteris quelpaertensis* CHING オシダ科

ヤワラシダ、ハリガネワラビの仲間であるが、亜寒帯性で、高山帯、亜高山帯に生じ、北はカムチャッカ、千島に達し本州でも寒い地方や高山地方に多く、南は僅かに四国石鎚山と屋久島の頂上に残っている。天城山で佐竹健三氏が採集した。

74 シラネワラビ *Dryopteris austriaca* WOYNAR オシダ科

亜高山性のもので、日本では中部以北の山地に多く、四国、九州にも高地に僅か分布する。天城山の上部に稀生する。国外では北アジア（シベリヤ、満州、カムチャッカ）、ヒマラヤ、ヨーロッパ、北米の北部に分布する。

75 ナチシダ *Pteris Wallichiana* AG. ワラビ科

大形のシダで、高さ2mに達する。伊豆では河津の谷に多く大滝下の群落は天然記念物に指定された。その他伊豆では熱海市や南部や西岸にも分布が判っている。日本の暖地から琉球列島、台湾、南中国、東南アジア、ヒマラヤ、マレー群島、サモア島に達する。北限は相模湯河原と房州である。本州では、はじめ紀州那智山で知られたもので伊豆では発育が良い。観光客や登山者が芽を見て太いワラビだと驚くことがある。

その他天城山には美しいもの、薬や香水原料となるもの、学問上貴いものが沢山あって書ききれないので筆を置く。

7 天城山に産することが疑しい植物

天城山について、多くの植物の報告があるが、分布上から見て、不自然のものや、私がまだ一度も天城山で見ないものなどを拾ってみる。もとより絶対無いとは断言出来ない。

シダ植物 アツイタ、

樹木 アズキナシ、ヤマモミジ、ベニドウダン（チチブドウダンの誤り）、カンボク、

草本 アカソ、スカボタデ、ノダイオウ、ホソパトリカブト、オオバショウマ、アズマシログネソウ、ヤマキケマン、ミツバベンケイソウ、ツルネコノメソウ、ネコノメソウ、オオヤマカタバミ、コタチツボスミレ、スミレサイシン、イワニンジン、ジュウニヒトエ、ミヤマトウバナ、クロバナヒキオコシ、ホソバナヤマハハコ、タマブキ、オタカラコウ（マルパチョウリョウソウの誤り?）、オヤマボクチ、ユモトマムシグサ、コヒゲイ、イヌイ、ウチワドコロ、カエデドコロ、ホソバキンチドリ。

8 保存に対する私見

伊豆半島とくに天城山の尾根すじと谷すじは珍しい植物、分布や生態上で貴重存在のもの、美しい花や葉をもつもの、特別に役に立つものなど沢山ある。全国の山岳中でも、白馬岳、大雪山、伊吹山、白山、南アルプス、屋久島などと共に特級の植物産地である。学問のためばかりでなく、いろいろの方面から考えても最も貴重な植物の豊庫の一つである。天城山の尾根を貫通するスカイラインの自動車道路の計画があるが、之は自然を破壊するのみでなく、観光、産業、生活のすべての点にきつと大小の被害がでて来るであろう。一部の人の売名や金もうけの為なら尚更いけない。

スカイラインが出来て自動車を通るようになると、その排気ガスのため、ガスに弱い植物は枯死し又は衰弱する。衰弱すれば病菌や害虫が殖えることは既に多くの例がある。枯死した倒木の跡には害草のササ類や有毒のアセビ、シキミ、刺のあるキイチゴ、タラノキ、サルトリイバラ、ノイバラ類が多くなる。ススキも多く生えて、一寸の火気でも山火事を起す。もし大雨が降れば土砂が下方の部落や田畑などに泥流となって流下して大被害となる。とくに天城山の溪谷はワサビ畑が多く、日本有数のワサビの大産地である。スカイラインの工事の際にも、出来た後でも、雨毎に土砂でワサビ畑は埋れてしまうことは必定である。

たとえスカイラインを完成したとて、富士山を眺めるには少し遠すぎて、箱根スカイラインよりも余程劣る。また天城山から海をながめても、何も見えないであろう。貴いシャクナゲの小株は全部掘り取られ、枝

まで伐って自動車を持ち去られるは必定である。少数の見回人だけで取締れない事は他の国立公園でも経験済みである。

営林署の業務がどうか知らないが、現在残っている自然林やそれに近い山林の伐採は止めて頂きたい。また航空機よりの除草剤や病害駆除薬の撒布も止めて頂きたい。八丁池にはボートを禁じ、下水の流入を禁じ、小屋も最小限度にして頂きたい。

Summary

The Amagi Mountains are situated in Izu Peninsula (Shizuoka Prefecture, Japan) and outstanding in their abundant vegetation. The history of floral studies and many interesting plant species of this area are described in this paper.

天城山の植物に関する主要な文献

- | | | |
|-------------------|------|---|
| 1) 秋山正平 | 1888 | 増訂 豆州志稿 (秋山富南原著) 堺屋書店 |
| 2) 奥山春季 | 1952 | 植研 27:99 |
| 3) 久保田久蔵 | 1941 | 自然科学と博物館 12:5 |
| 4) 倉田悟 | 1949 | 東京林友 2-1 |
| 5) ——— | 1952 | 花と植物 5:10 |
| 6) 倉田悟, 益子進, 佐竹健三 | 1960 | 伊豆のしだ——東京営林局 |
| 7) 志村義雄 | 1967 | 静岡県シダ植物目録——静岡県植物誌 静岡県生物研究会 |
| 8) 杉本順一 | 1947 | 静岡県の植物 明文堂 |
| 9) ——— | 1951 | 伊豆半島の植物——「伊豆半島」 82 静岡県庁 |
| 10) ——— | 1962 | 伊豆の植物——東京緑友会 |
| 11) ——— | 1967 | 静岡県種子植物目録, 同県植物分布の概要, 同県植物研究史——静岡県植物誌, 静岡県生物研究会 |
| 12) 高橋秀男 | 1971 | フオツサマグナ要素の植物——神奈川県博研報, 自然科学 2号 |
| 13) 田代善太郎 | 1943 | 分類地理 13:286 |
| 14) 林弥栄 | 1952 | 天城国有林の森林植物 東京営林局 |
| 15) 原寛, 金井弘夫 | 1958 | 日本種子植物分布図集 1. 井上書店 |
| 16) ——— | 1959 | 同上 2. 同上 |
| 17) Hara, Hiroshi | 1959 | An outline of the Phytogeography of Japan pp39~41 東京大学理学部 |
| 18) 原田利一 | 1947 | 植研 21:67 |
| 19) 久内清孝 | 1918 | 植研 2:41 |
| 20) 文化庁 | 1971 | 植生図, 主要動植物地図 静岡県 文化庁 |
| 21) 本田正次 | 1951 | 墨のらくがき 60:4 |
| 22) 九里聰雄 | 1951 | 同上 60:20 |
| 23) 前川文夫 | 1949 | 植研 24:91 |
| 24) 松浦正郎 | 1964 | 北陸植 13:4 |